

高等学校の音楽学習におけるJ-POPでの「教育内容」について —教科書掲載曲の歌詞に描かれる「憧憬」

尾崎 祐司*

(平成24年9月26日受付；平成24年11月5日受理)

要 旨

高等学校の芸術科〈音楽〉の教科書にJ-POPが主に歌唱教材として掲載されてきた。しかし、これらの教材によって教師が高校生に何を教えようとしているのか「教育内容」が明確ではない。そこで、筆者は教科書掲載曲の歌詞の分析を行い、「音楽の文化的側面」との関連を考察した。

その結果、それらの歌詞は「人生」や「恋愛」をテーマとしていることが明らかになった。また、その内容は現状への満足を促すものではなく将来への希望を抱かせるもの、お互いを助け合ったり励まし合ったりするものであった。そして、これらの歌詞が表す情景や心情等を生徒に感受させることを通じて、人間の生き方などを指導することが「教育内容」となっている、という結論を得た。

KEY WORDS

High school art subject “music” 高等学校芸術科〈音楽〉 J-POP Jポップ Textbook 教科書
a relation with life and the society 生活や社会とのかかわり Education contents 教育内容

1. 研究の目的

本研究の目的は高等学校芸術科〈音楽I〉の教科書に掲載されている、J-POP¹⁾の曲による「教育内容」を明らかにすることである。平成25年度入学生から実施される、平成21年3月告示の高等学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）の改訂で芸術科〈音楽〉ではすべての領域、すなわち「A 表現」（歌唱・器楽・創作）と「B 鑑賞」において、「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して」¹⁾が指導事項として新たに示された。また、「内容の取扱い」において、「音や音楽と生活や社会とのかかわりを考えさせ、音環境への関心を高めるよう配慮する」²⁾ことを求めている。筆者らは先の研究³⁾でこれらの点において「生活や社会とのかかわり」の観点からポピュラー音楽教材の導入について実態調査を行った。その結果、歌う場合においても合唱といった技能習得に重点をおいた経験が殆どで、「生活や社会とのかかわり」に踏み込んだ授業が重視されていない実態が明らかになった。そこで、新学習指導要領での学習の意義に、「社会の成員」として「音楽の文化的な知識」を「生活力」として育成する授業開発の必要性が明らかになったことを指摘した。

しかし、「知覚・感受」を最終目的とした「音や音楽と生活や社会とのかかわりを考えさせ、音環境への関心を高めるよう配慮する」授業理念のもとで、ポピュラー音楽²⁾から最終的に何を感じ取らせることが必要なか明らかにしてこなかった。

そこで、本研究では教科書掲載曲のJ-POPにおいて何が「知覚・感受」の対象とされているのか、その対象を「教育内容」と位置づけ考察することを目的とする。研究の方法は「音楽I」の掲載曲に使用されている語彙のカテゴリ分類を行い、「音楽の文化的側面」⁴⁾との関連を分析する。

2. 問題の所在：「感受」の対象

現在、J-POPとカテゴリ化されている曲は、平成元年告示の高等学校学習指導要領（平成6年4月施行）への改訂時から教科書に掲載されるようになった。当時は「ヒット曲」として「愛は勝つ」（KAN）、「どんなときも」（槇原敬之）、「ランナー」（爆風スランプ）が楽譜付きで「初登場」することが「話題」として新聞に報道された。しかも見出しは『メディア「高校教科書柔らか変身」』とされ、「移り気な高校生の心をつかもうと（中略）出版社側も知恵

*芸術・体育教育学系

をしぼった」⁽⁵⁾と高校生の興味・関心を意識した内容を取り入れることで、柔軟に教育内容も対応していることがアピールされている。すなわち、教科書への掲載によって高校生の嗜好として「ヒット曲」に何らかの教育的「効果」があることが認められた。

問題の所在は教科書に掲載されはしたものの、指導する「内容」は他の歌唱教材曲と同様に「歌詞及び曲想の把握と表現の工夫」「合唱における基本と表現の工夫」⁽⁶⁾といった従来の観点でそのまま実践されてきた。この点について、先行の事例研究においても教材としてJ-POPを扱う場合、「歌う」活動として主に合唱が取り上げられていることが報告されている。⁽⁷⁾

新学習指導要領では「特質や雰囲気などを受感する」⁽⁸⁾のために、改訂で目標に加わった「音楽文化についての理解を深める」について「中学校音楽科の学習の上に立ち、文化的・歴史的背景などの広い視野で音楽に目を向けて、音楽文化の理解を深めていくこと」⁽⁹⁾を目指している。すなわち、J-POPの掲載曲については、これまでの「表現の工夫」といった「音楽の技能的側面」⁽¹⁰⁾だけではなく、「音楽の文化的側面」も音楽教育的にどう授業に反映させるべきか考察する必要性が生じたことを意味する。

したがって、「感受」する対象としてJ-POPを教材化するためには、何が「感受」の対象と成り得るのか。筆者は本研究では「歌詞」に焦点をあて、高校生にどのような教育的「効果」を期待するメッセージを含んでいるのか、その内容を分析することにした。

3. 先行研究：教材化への模索

これまでの日本の学校音楽教育におけるポピュラー音楽の取扱いについて、小泉は1960年代以降の採用の是非に関する音楽教師の態度をおおむね次の5段階に区分することができる、としている。その5段階とは(1)採用の却下(拒絶)、(2)興味づけとしての採用(妥協)、(3)児童・生徒の音楽思考の把握(迎合)、(4)ポピュラー音楽の教材化(正当化)、(5)音楽メディアの自覚化(メディア教育)⁽¹¹⁾、である。小泉の研究は学校音楽教育とメディアとの共存する方途を探るものであるが、筆者はこの「5段階」のうち(1)～(4)について、これまでの教育現場での「模索」と解釈し着目している。

その模索とは、(1)は「歌謡曲⁽³⁾による青少年の音楽文化の“汚染”は、クラシック音楽という正統的文化の教育をもって“浄化”すべし、という意見が一般的であった」⁽¹²⁾と歌詞の低俗さが批判の矛先になっていたとされている。(2)は「子どもが歌謡曲を好むのはある程度仕方ないこと(中略)教育的価値については依然疑問が残るため、“良い歌謡曲”であれば授業でも取り上げていこう」⁽¹³⁾という段階である。この段階は音楽教師が何をもって“良い歌謡曲”と判断するのか、ここでは「歌詞の問題等」を指摘しているが何らかの「基準」があることは疑いの余地がない。(3)は子どもの趣味を知ることで「授業の活性化に役立たせよう」⁽¹⁴⁾という段階である。すなわち「活動の動機付けの有効な手段」⁽¹⁵⁾としての利用である。(4)は栗原の「幅広い音楽体験を持たせると共に、クラシックへの関心の芽を育てなくてはならない」⁽¹⁶⁾という認識に対して、小泉は「ポピュラー音楽の学習をクラシック音楽理解に至る通過点として捉える傾向にあった」⁽¹⁷⁾と指摘している。さらに、そのために「教科書に掲載されるポピュラー曲の編曲もクラシック音楽の重要な構成要素である旋律・リズム、和声の観点から“改変”される」⁽¹⁸⁾と捉えている。

しかし、この“改変”は単純に解消できる問題ではない。2007年に水戸がJ-POP教材化の課題について「いわゆるオリジナルと違った形でやらざるを得ないという問題」⁽¹⁹⁾があることを指摘している。また、「J-POPの曲は、アーティストの歌い方、リズムのノリ、様々な音源による伴奏などが絡み合っていてオリジナルのサウンドをつくっていると思う」⁽²⁰⁾とクラシック音楽の文脈とは異なるオリジナルな「サウンド」概念の存在も述べている。

したがって、教科書掲載曲は「教育」というフィルターをして合唱曲への編曲、オリジナルからの移調、前奏や間奏等のカット⁽⁴⁾、といった「原曲を西洋音楽ナイズしてうまくアレンジして、教材化をうまく図っている」⁽²¹⁾現状が続いていると理解できる。

このように先行研究を辿ると、教材化への過程には「良い歌謡曲」といった不明確な選曲の「基準」が存在することが分かる。教科書掲載曲も後掲の表1～表6のとおり「歌うための教材」として扱われている。この扱いからも掲載する曲の歌詞に高校生へ向けて、どのようなメッセージを発するのが良いか模索が続いてきたと理解できる。

4. 研究の内容

4. 1 「歌詞」のメッセージは何か

この章では上記の先行研究での「模索」を踏まえ、教科書教材化されているJ-POPの「歌詞」を教育的に何が「良い歌謡曲」と捉えられるか、「音楽の文化的側面」に焦点をあて考察してみる。

筆者が指摘している「基準」とは単に「歌詞」の表面上の意味に留まらない。例えば、サイモン・フリスはロックのルーツを探る中で、「ロックには固定した音楽的な意味はなく、むしろ諸々の意味の戯れにからんでいる（中略）リズム法則、表現上のしきたり、フォームについて、多様なアメリカの大衆的伝統の中で発展してきたものを使う。黒人音楽やカントリー、フォーク（中略）しかし、これらの元となった音楽がいかに機能しているかに注目すると、音楽の意味は単にサウンドと歌詞の問題ではなく、文化とコンテキストによっても決定されるものであることが、私には明らかになってきた⁽²²⁾」と述べている。このように、ある教材曲にはその「音楽の文化的側面」が何らかの高校生へのメッセージがあり、その「何らか」が「基準」になっていると考える。

4. 2 「飢餓と憧憬」

筆者は教材曲の「音楽の文化的側面」を理解する上で、「なぜこの歌は流行したのか」という疑問を抱く。この点について、昭和を代表する作詞家の阿久悠は「飢餓と憧憬」というテーマで流行した時代に理由があることを説明している。まず、阿久は「歌謡曲は“飢餓と憧憬”で成立しているのではないか。（中略）飢餓、つまり、心の中の飢えているものと、その飢え故にあこがれるものが歌謡曲になっている⁽²³⁾」と詞を書くため動機の仮説を立てている。阿久の仮説は敗戦直後の昭和20年代前半には「食べ物売り⁵⁾」の歌が集中しており、「実にわかりやすい飢餓であり、納得のいく憧憬⁽²⁴⁾」と事例をあげている。昭和39年の「海外旅行自由化」以降は、港、外国の都市名、パリ、ロンドン、サンフランシスコなどをタイトルにした歌が消えた。その後、「港」ではなく「港町」の歌が登場した。この変遷について阿久は、次のように解説している。主人公が「港」から見つめる沖合いの彼方は外国で、夢とロマンス、未来と希望と自由があった。しかし、「港町」に変化するということは「飢餓と憧憬」が変わったことを意味する。例えば、海に背を向けて町を見つめ、そこに吹き寄せられて来た人たちの、いくらカリアリティのある人生というもの、思いやるという形に変わる。⁽²⁵⁾

すなわち、流行する「歌詞」はその時代の「飢餓」と「憧憬」が表裏一体であるということが分かる。しかし、阿久は「社会が整備され、生活が上昇してくるごとに“飢餓”は精神的になり、個人的になり、見えにくくなって来る⁽²⁶⁾」と社会の成熟による作詞の苦悩も吐露するなど、「飢餓と憧憬」発見の難しさも指摘している。

4. 3 見える「飢餓」の減少

「ヒット曲」が教科書に掲載されたことが新聞報道された頃の朝日新聞『天声人語』（1992年8月16日）には、「高校生の意識と生活」というタイトルで、ある調査報告書の回答のうち、50%超が「よくそう思う」と答えた質問内容を紹介している。その項目のうち筆者が着目したものは二つある。一つは「日本の将来を色で表現するとしたら何色を選びますか」に対し、「灰色」38.8%「黒」15.7%最も少ない「ばら色」の3.1%。もう一つは、「今の日本の社会に満足していますか」については「やや不満」「不満」をあわせて69.6%という結果である。

この1992年は『東京ラブストーリー』など純愛ドラマが隆盛で武田鉄矢と浅野温子が主演の『101回目のプロポーズ』の「僕は死にましえん」が流行語になっている。また、番組中に頻りに流れたショパン作曲の「別れの歌」のピアノピースが7万部といった驚異的な売りあげを記録している。歌では「会いたい」（沢田知可子：1990）がヒットした。これは「喝采」（ちあきなおみ：1972）以来久々に「死」による別れをテーマにした曲である。⁽²⁷⁾

「喝采」が流行した1972年は坪内によれば、ひとつの時代の「はじまりとおわり」であり「おわりのはじまり」を象徴している。この点について難波江は吉田拓郎の『結婚しようよ』の歌詞を取り上げ、「若者の生き方を若者文化として認知させるほどの大ヒットとなった⁽²⁸⁾」要因を分析している。その要因とは「長髪」「約束」「町」「教会（白いチャペル）」「仲間」「おうち」「結婚」等の語句すべてに「意味」があったとしている。例えば「長髪」は反体制のシンボルとみなされていたこと、家父長制による「家」など旧世代との結婚観の違いなどである。

このような価値観の変化が「飢餓」とし「歌詞」に反映されたのが1992年と1972年の事例なのかもしれない。もし、このような一面から「飢餓」を捉えるならばそれは何か。それはバブル経済崩壊直後の漠然とした失望感や男女の恋愛に絡む「新しい価値観の創造」とは言えないであろうか。

このように考えると、「失望感」や「恋愛」、「新しい若者文化の肯定」がテーマとなった「歌詞」は、将来への希望、品行方正といった尺度で理解しようとする、「低俗」であり「浄化」の対象と当時は判断されたのであろう。

逆に、「ヒット曲」が教科書に初めて掲載された平成の初期は、阿久が「生活が上昇してくるごとに“飢餓”は精神的になり」と指摘するように、見える「飢餓」が減少したと言えないだろうか。例えば、1987年には日本企業がゴッホの名作絵画「ひまわり」を約53億円で落札、日本の海外資産総額が1984年9月から5200億ドルから1兆190億ドルと倍増⁽²⁹⁾するなど、経済の繁栄が見える「飢餓」を減らしてきたのかもしれない。

4. 4 不鮮明な「憧憬」

では、もし見える「飢餓」がないとしたら「憧憬」はどう設定されるのか。次にヒット曲の教科書掲載が始まった1990年代の精神的な「飢餓」について考察してみる。

1990年代の「飢餓と憧憬」については、藤川が「子どもの変化」という観点で考察⁽⁶⁾している。藤川のいう「子ども」とは小学生・中学生・高校生及びその同世代の若者を一括した定義であるが、「飢餓と憧憬」についての分析対象は主に高校生の年齢層のものを対象にしている。

例えば、小室哲也プロデュースのヒット曲である『I'm proud』（華原朋美：1996）は当時女子高生を中心に、カラオケで良く歌われた曲であり、「自分を誇れるという自己肯定を、のびのびした高音で歌うことは、とても気持ちがいいはずだ。自分を肯定したいが現実はなかなかそうはいかないという者にとって、“I'm proud”は東の間の自己肯定を与えてくれる歌である⁽³⁰⁾」と分析している。この他に自分への誇りをテーマとした大ヒット曲として『PRIDE』（今井美樹：1996）をあげているが、これらがヒットした背景（「飢餓と憧憬」）として「努力や経験という代償なしに誇り＝プライドを得たいという欲求、言い換えれば根拠がなくても自分を肯定したいという欲求がある」と考える必要がある⁽³¹⁾としている。藤川は1996年以降のヒット曲の歌詞を分析した「欲求」の変遷を以下のようにまとめている。

- 1996年：「自己肯定ソング」・・・『I'm proud』（華原朋美）, 『PRIDE』（今井美樹）
- ・努力や経験という代償なしに誇り＝プライドを得たい→「自分」に向かう歌詞。
- 1997年：二人称「あなた」を中心にした歌詞・・・『ひだまりの詩』（Le Couple）, 『However』（GLAY）
- ・「自分」から「あなた」という二人称が増えた。
 - ・「終わらない日常⁽⁷⁾」をやり過ごすことに疲れはじめている
- 1998年：「癒しソング」・・・『夜空ノムコウ』（SMAP）, 『タイミング』（ブラックビスケッツ）
- ・聴き手を癒すような曲のヒットが非常に目立つようになる→簡単に解決しない困難を歌う
 - ・hide（X-JAPANの元ギタリスト）の死→自由、夢、死といった人間にとって根源的な問題を正面から扱うような歌詞→「自己肯定」は「自己欺瞞」という気付き→自分の生き方の問題をどう解決するか
 - ・『Automatic』（宇多田ヒカル）
 - 「飾らない愛」→「今、生きているという実感」
- 1999年：「等身大ソング」・・・『春～Spring～』（Hysteric Blue）
- ・高校生の等身大の夢が直接的に歌われている。「授業よりも、食事よりも、もっと大切なこと『私…歌が好き…』』というフレーズ
 - ・長引く不況で、お金をかけて楽しむということは難しくなっている。物質的には豊かでなくても、自分らしく夢を追うことが「終わらない日常」を超える処方箋として、求められるようになってきている。

藤川による歌詞の分析は、確かに阿久のいう「社会が整備され、生活が上昇してくるごとに“飢餓”は精神的になり、個人的になり」という提唱を裏付けている。また、これら1996年以降を「経済も成熟しきった」と捉えた場合、「憧憬」にあたるものも「自己肯定」「癒し」や「等身大ソング」というように、将来への「夢」や「希望」といった時間的に遠い将来よりも、現実的な今をどう生きるかということが「憧憬」になっている。すなわち、バブル経済の崩壊によって、年功序列と終身雇用制といった日本型企业経営の終焉を向かえ人生設計が描きにくくなったのである。その結果は先に前掲した朝日新聞『天声人語』（1992年8月16日）の調査報告書の回答を踏まえると理解できる。このときの調査ではさらに「学校教育に何を期待していますか」という問いも行っている。その質問に対して「人間の生き方など人格形成についての指導」という答えが最も多かったことが掲載されている。具体的な職種よりも「生き方」「人格形成」といった抽象的で時間的に長期的な概念であり、先行きの見えにくさこそがまさしく高校生が感じ取っている不鮮明な「憧憬」であることが分かる。

4. 5 高校生への「憧憬」づくり

ここまでで、ヒット曲とは「飢餓と憧憬」が人々の心と一致したときヒットし、そのときその曲の「音楽の文化的側面」が理解するものとして価値が生まれる、ということが明らかになった。だからといって高校の教科書に膨大なヒット曲をランダムに掲載される訳ではない。それは、高校生が昨今の現実の世界をいくら「終わらない日常」と感じ取っているからといっても、教材まで「現実的な今」を歌っても教育的発展性がない。音楽学習をとおして「知覚・感受」する学力を養うという教科としての学習課題と呼応する必要があるからである。

では、J-POPの「歌詞」の何が「良い歌謡曲」とみなされるのか。筆者は大人が高校生の現実の世界の憧憬とは異なる教育的な「憧憬」をつくらうとしている、と捉えている。それは藤川が指摘する「自己肯定」「癒し」「等身大」といった現状をどう満足するか、ではなく将来にどう向かっていくか、という「キーワード」が「歌詞」に潜伏しているということである。したがって、その「憧憬」を教科書への掲載「基準」と設定し「歌詞」と「音楽の文化的側面」を分析する。

5. 研究の方法

ヒット曲が掲載された平成6年4月施行の高等学校学習指導要領以降の10種類の高等学校教科書「音楽Ⅰ」の掲載曲の歌詞から「音楽の文化的側面」と解釈できる「キーワード」を抽出し、藤川に準じた分析を行った。教科書の出版社、検定年月日、教科書番号、掲載曲、筆者が抽出したキーワードは表1～表10のとおりである。なお、表9「川の流れのように」、表10「青い山脈」はJ-POPの定義に当てはまらないが、過去に掲載されなかったヒット曲という意味で表に加えた。表11は表1～表10の「キーワード」をカテゴリ分類したものである。

表1 「高校生の音楽1」(音楽之友社)[平成9年2月28日検定済:89友社 音I522]

[楽しい合唱曲]	キーワード
上を向いて歩こう	上を向く 歩く なみだ しあわせ かなしみ
LOVE LOVE LOVE	好き つたえたい うまくいえない ゆめ 会いたい 出会った おもいで
時代	かなしくて なみだ えがお そんなじだい くよくよしない よろこび かなしみ わかれ 出会い くりかえし 生まれ変わって
少年時代	あこがれ ころろ ゆめ むねのたかなり ゆめはなび
夢をあきらめないで	いつか たびだつ それぞれ みち あるいていく くるしいとき つまづく じょうず 超えてゆける あなた ゆめ あきらめないで

表2 「高校生の音楽1」(音楽之友社)[平成14年3月10日検定済:89友社 音I005]

[青春を歌う]	キーワード
翼をください	ねがいごと おおぞら とみ めいよ ゆめ じゆう
少年時代	前掲
花～すべての人に心の花を～	なきなさい わらいなさい いつのひか はなをさかそうよ
上を向いて歩こう	前掲

表3 「新 高校の音楽1」(音楽之友社)[平成14年3月10日検定済:89友社 音I006]

[みんなで歌おう]	キーワード
未来へ	あなた あゆむみち みらい はは やさしさ すなおになれず
夜空ノムコウ	なにかをしんじてこれたかなあ あしたがまっている きみがなにかつたえようと にぎりかえした ころろのやわらかいばしょ かなしみっていつかはきえてしまう
翼をください	前掲

表4 「高校生の音楽1 改訂新版」(音楽之友社)[平成18年3月9日検定済:89友社 音I011]

[青春を歌う]	キーワード
翼をください	前掲
少年時代	前掲
世界に一つだけの花	ひとそれぞれこのみ どれもきれい だれがいちばん あらそうこともしない むねをはっている にんげんは くらべたがる ひとりひとりちがう いちばん はなをさかせる いっしょうけんめい ナンバーワン オンリーワン
上を向いて歩こう	前掲

表5 「高校の音楽1 改訂新版」(音楽之友社) [平成18年3月9日検定済:89友社 音I012]

[みんなで歌おう]	キーワード
世界に一つだけの花	前掲
未来へ	前掲
翼をください	前掲
[合唱曲選]	
涙そうそう	ありがとう はげましてくれるひとよ えがお よみがえるひ などそうそう

表6 「高校生の音楽1」(音楽之友社) [平成24年3月5日検定済:89友社 音I305]

[青春を歌う]	キーワード
翼をください	前掲
少年時代	前掲
帰る場所	きみ えらんだみち あいするひと おもいだす ぼく またあえる やくそく
心の瞳	こころ ひとみ きみ あいすること ことばでいえない とおまわり じんせい あいのすべて あした きずな
見上げてごらん夜の星を	ちいさなほし ちいさなひかり ささやかなしあわせ おいかけよう ゆめ ふたりならくるしくなんかない
風になりたい	あなたので なみにもまれ かぜになりたい いいことなかったまち うまれてきた しあわせ かつこわるくたっていい あなた

表7 「Mousa1」(教育芸術社) [平成9年2月28日検定済:27教芸 音I520]

[日本のポピュラーソング]	キーワード
LOVE LOVE LOVE	前掲
瞳がほほえむから	さいしょのあさ かがやき あなた なのはな はくしゅ ゆれてる まよった なみだ ちから あふれるおもい ことば
12月の雨	おそくおきたあさ はんぶんねむり いまでもあなたが わらって このへやにくる しんせつなともだち
True Love	きみ わらってくれた めをとじて しんじて はるか とおいみらい ゆめ
Big Tree	うみ ふしぎなき ねむりからめざめて ゆめをきがえた どんなきせつ じゆうのすがた たおれない ころ
少年時代	前掲

表8 「Mousa1」(教育芸術社) [平成14年3月10日検定済:27教芸 音I004]

[ポピュラーソング]	キーワード
TSUNAMI	よわきなほく なみだもろい かこがある すきなひと ひと あい やみにさまよう destiny (運命) なみだ おしゃべりできない まほう ゆめ おもいで あめ
未来へ	前掲
翼をください	前掲
きっと 一光のありか	うしろになげた いしころ あした きめられない びょうどう にんげん おもしろい あおいうなばら こえてゆこう えいえんのふね
上を向いて歩こう	前掲
少年時代	前掲
晩夏(ひとりの季節)	なつ なごるあつさ あきかぜ ころほそさ コスモス やがてくるさみしいきせつが こいびと

表9 「Mousa1」(教育芸術社) [平成18年3月9日検定済:27教芸 音I010]

[表現]合唱	キーワード
涙そうそう	前掲
翼をください	前掲
見上げてごらん夜の星を	前掲
風になりたい	前掲
少年時代	前掲

川の流れのように	しらずしらず あるいてきた みち ふるさと じんせい かわ じだい
あなたに逢いたくて	ふたり おもいで さよなら やっとわらえる じんせい いっしょ こうかい あいしてる
[表現] 器楽：フォークソングを歌ってみよう	
「いちご白書」をもう一度	いつか きみ 授業 ふたり こいしい もういちど

表10 「Mousa1」(教育芸術社) [平成24年 3月 5日検定済：27教芸 音 I 303]

[歌唱] (言葉を大切に歌おう)	キーワード
ありがとう	ありがとう つたえたい あなたのゆめ いつからか ふたりのゆめ かわっていた し んじたこのみち たしかめていくように
[歌唱] (世代を超えて長く歌い継がれている歌謡曲を歌おう)	
青い山脈	わかくあかるい うたごえ われらのゆめ
青い珊瑚礁	わたしのこい はしれ あなたがすき すべてをわすれる ふたりつきり
[合唱]	
少年時代	前掲
見上げてごらん夜の星を	前掲
翼をください	前掲
[歌唱] (ギターの弾き歌いを楽しもう)	
なごり雪	きみのよこ とうきょうでみるゆき はるがきて きみはきれいになった

表11 キーワードの分類

カテゴリ 1	カテゴリ 2	キーワード
外的な方向性としての心情の変化	未来 (17)	歩く ゆめ いつか たびだつ それぞれ あなた あゆむみち みらい あした まっている ちいさなほし ちいさなひかり おいかけよう とおいみらい わかくあかるい うたご え われらのゆめ
	恋愛 (66)	すき あいたい あなた きみがなにかつたえようと きみ あいするひと ほく またあえ る やくそく ことばでいえない あいのすべて ふたりならくるしくなんかない あなたの て さいしょのあさ かがやき なのはな はくしゅ ゆれてる まよった なみだ ちから あふれるおもい ことば おそくおきたあさ はんぶんねむり いまでもあなたが わらって このへやにくる しんせつなともだち わらってくれた めをとじて しんじて はるか よ わきなほく すきなひと あい やみにさまよう destiny (運命) おしゃべりできない まほう なつ なごるあつさ あきかぜ ころほそさ コスモス やがてくるさみしいきせ つがこいびと あなたのゆめ いつからか ふたりのゆめ かわっていた わたしのこい は しれ あなたがすき すべてをわすれる ふたりつきり きみのよこ とうきょうでみるゆき はるがきて きみはきれいになった ふたり さよなら やっとわらえる いっしょ こうか い あいしてる いつか
	希望 (12)	つたえたい あこがれ みち あきらめないで ねがいごと おおぞら とみ めいよ じゅ う かっこわるくたっていい つたえたい もういちど
	人生 (65)	なみだ 出会った わかれ おもいで そんなじだい くりかえし うまれかわって むねの たかなり ゆめはなび あるいていく くるしいとき つまづく じょうず 超えてゆける なきなさい わらいなさい いつのひか はなをさかそうよ なにかをしんじてくれたかなあ えらんだみち じんせい とおまわり なみにもまれ かせになりたい うまれてきた うみ ふしぎなき ねむりからめざめて ゆめをきがえた どんなきせつ じゅうのすがた たおれ ない うしろになげた いしころ あした きめられない びょうどう にんげん おもしろ い あおいうなばら こえてゆこう えいえんのふね しんじたこのみち たしかめていく ように ひとそれぞれこのみ どれもきれい だれがいちばん あらそうこともしない むね をはっている にんげんは くらべたがる ひとりひとりちがう いちばん はなをさかせる いっしょうけんめい ナンバーワン オンリーワン しらずしらず あるいてきた みち ふ るさと じんせい かわ じだい

内的な方向性としての心情の変化	感謝 (9)	はは やさしさ すなおになれず にぎりかえした ありがとう はげましてくれるひとよ えがお よみがえるひ なだそうそう
	喜び (3)	しあわせ よろこび ささやかなしあわせ
	悲しみ (11)	うまくいえない かなしくて かなしみ かなしみっていつかはきえてしまう おもいだす いいことなかったまち おもいで あめ なみだもろい かこがある こいしい
	心 (4)	こころ こころのやわらかいばしょ ひとみ きずな

6. 結果と分析

抽出した各歌詞の「キーワード」を、「未来」「恋愛」「希望」「人生」「感謝」「喜び」「悲しみ」「心」の8カテゴリに分け、これを「カテゴリ2」とした。さらに、上位のカテゴリとして「外的な方向性としての心情の変化」「内的な方向性としての心情の変化」という2つを「カテゴリ1」とした。

前者には「未来」「恋愛」「希望」「人生」の4カテゴリを属させた。このキーワードは「人間の生き方など人格形成についての指導」の要素が強いと判断したものである。すなわち、この言葉を歌うことで高校生が将来の自分の行為・行動の変化を期待できると考えられるものである。それは行為・行動といった外的に影響を与えるものであるため、「外的な方向性としての心情の変化」と名付けた。もちろん歌詞そのもの前後の文脈によって分類したのものもある。

後者のカテゴリは「感謝」「喜び」「悲しみ」「心」といった、ある対象に対して情動的に直接影響を受けた気持ちの変化に関するものである。したがって、自分が「どう感じたか」といった内的な変化の要素が強いと判断したものであるため、「内的な方向性としての心情の変化」と名付けた。

まず、「外的な方向性としての心情の変化」であるが、異性への思いという「恋愛」がキーワード数としても全体の66ワードと最多である。また、「生き方」という意味では「人生」が65ワードと僅差である。しかし、将来を設定している「未来」(17)「希望」(12)も同意で捉え合算すると、94ワードと順位が入れ替わる。この結果は、高校生が学校教育に期待するという「人間の生き方など人格形成についての指導」といったニーズを満たしていることが裏付けられる。

「恋愛」が多いことは、「流行歌における恋愛の歌の比率は、明治時代には7パーセントにすぎなかった。しかし、1990年代になると、その数字は97パーセントにも達している」⁽³²⁾、というようにヒット曲そのものに「恋愛」の需要が高いことに起因すると考えられる。しかし、教科書の歌詞には男女の恋愛観の中に「俺」と「おまえ」という人称で「俺についてこい」「あなたについていく」といった男尊女卑的な印象を抱かせる使い方はなされていない。あくまでも、『心の瞳』『True Love』など男性の立場からの文脈での二人称は「きみ」であって、女性を愛おしくかけがえのない存在という気持ちを醸し出している。また、『夢をあきらめないで』『ありがとう』など女性の立場であっても「あなた」を使い男性を励ましや感謝を歌っている。その他、「恋愛」の歌の場合は再会を願う意を含んだキーワードも使われている。また、1972年の『結婚しようよ』のような社会的な価値観への疑問を投げかけるメッセージとなるキーワードがないことも特徴であった。

また、「人生」については筆者が抽出したキーワードには2つの側面があった。一つは「なみだ」「くるしいとき」「とおまわり」「なみにもまれ」と生きていくうえでは苦労があるといった側面、もう一つは「超えてゆける」「おもしろい」「しんじたこのみち」「はなをさかせる」といった希望を抱かせる側面の二者があった。また、藤川が指摘したような「自己肯定」「癒し」「等身大」といった現状への満足を想起させるキーワードはなかった。ただし、「世界に一つだけの花」の歌詞は「ナンバーワンにならなくてもいい」と「自己肯定」と解釈できるが、その続きは「もっともっと特別なオンリーワン」と他人とは異なる個性の発揮を促す文脈であるため、「人生」のカテゴリにキーワードを含めた。実際、この曲の作詞者である横原敬之はこの歌について「“聞いている人の人生に役に立つ歌”であり“意味のある歌”」とインタビューで話している。⁽³³⁾

次に、「内的な方向性としての心情の変化」では、「心の瞳」「風になりたい」の歌詞のように、「ひとみ」「あいする」「わかりあえる」「しあわせにかんじる」など自身の感情そのものを表現するキーワードで歌詞が成り立っている。この感情は「人生」や「恋愛」による心の変化から二次的に生じるものである。すなわち、「曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌う」⁽³⁴⁾という新学習指導要領の「歌唱」での指導内容に沿っている。したがって、教科書掲載曲は「歌詞の意味、歌詞が表す情景や心情、歌詞の成立の背景」⁽³⁵⁾の理解に至りやすいものである。そして、J-POPの歌詞で高校生への「憧憬」として設定しているものは、肯定的なメッセージ

で感情の変化を期待できる「人生」や「恋愛」をモチーフにした歌詞なのである。

7. 結論

このように教科書に掲載されているJ-POPの歌詞を分析すると、「音や音楽と生活や社会とのかかわり」を考えさせるために、どのような「憧憬」を描けるかという判断する3つの「基準」の存在が明らかになった。そして、その3つとは①「人生」をテーマとしたものは現状への満足を促すものではなく、人生には苦労があることや希望を抱かせる内容であること、②「恋愛」をテーマとしたものはお互いを助け合い尊重し合う内容であること、③①②のテーマから肯定的なメッセージで感情の変化を期待できる内容であること、である。

したがって、高校生が歌う教科書のJ-POPは、「人生」や「恋愛」といった歌詞に①～③の「憧憬」を設定し、「歌詞の意味、歌詞が表す情景や心情、歌詞の成立の背景」を感じさせることをとおして、「人間の生き方など人格形成についての指導」を「教育内容」としているという結論を得た。

さいごに、今回は歌詞に焦点をあててその内容を考察したが、歌には音楽としての機能も有するためこの関連については今後の課題としたい。

注

- 1) 1988年10月に開局したばかりの東京のFM局「J-WAVE」で、洋楽しか流さない放送局で、邦楽をオンエアするために考え出されたジャンル名。(鳥賀陽弘道(2005)『Jポップとは何かー巨大化する音楽産業ー』岩波新書, p.3)
教科書の解説では「第二次世界大戦後の日本のポピュラー・ソングは、アメリカのジャズやロックなどの影響を受け、テクノロジーやメディアの発達に伴って飛躍的に展開した。歌謡曲中心の時代から、1960年代のグループ・サウンズやフォーク・ソング、70～80年代のアイドル・ポップやニューミュージックを経て、90年代の終わりからは、Jポップと呼ばれるロックやR&B系の歌が主流になっている」(音楽之友社「高校生の音楽1」平成24年3月5日[89友社 音I 305], p.17)
- 2) 教科書では「19世紀末の蓄音機の発明以来、マスメディアとともに生まれ育ってきた。ブルース、ジャズ、ロックをはじめ、さまざまなラテン音楽やアフリカ、ヨーロッパ、アジアなど世界各地に特有のものがあり、そのジャンルは数えきれない」(山本文茂他(2012)『高校生の音楽1』音楽之友社, p.152)としている。本論ではこのうちの日本の音楽を「ヒット曲」とし、さらにアメリカのジャズやロックの影響を受けているものを「J-POP」とする。
- 3) 「歌謡曲」という言葉が日本の大衆歌曲の呼称として用いられるようになったのは、NHKのラジオ放送が始まった1925年以降(小原光一他(2012)『MOUSA1』教育芸術社, p.124)である。本論ではJ-POPというジャンルが使われる以前のヒット曲の総称として使用する。
- 4) 例えば『少年時代』の原調はA-durであるが、教科書はG-durである。
- 5) 阿久が事例としているのは、「ミネソタの卵売り」(歌: 暁テル子/詞: 佐伯孝夫/曲: 利根一郎/昭和26年)、「長崎のザボン売り」(歌: 小畑実/詞: 石本美由起/曲: 江口夜詩/昭和23年)
- 6) 藤川大祐は「子どもたちが多くの時間を使い能動的に関わっているものから、子どもたちの状況の変化を捉える必要がある」と仮説を立て、音楽やマンガなどのサブ・カルチャー等の分析の研究の一つとして、J-POPの分析を行った。藤川大祐(1999)「ヒット曲の変化と子どもたちの状況」『金城学院大学論集人文科学編32』金城学院大学, 同(2000)「ヒット曲の変化と子どもたちの状況(2)」『金城学院大学論集人文科学編33』金城学院大学
- 7) 「これからは輝かしい進歩もないし、おぞましき破滅もない」という女の子を中心とした終末観。宮台真司(1995)『終わりなき日常を生きろ』筑摩書房, p.86

引用文献

- (1) 文部科学省(2009a)『高等学校学習指導要領 平成21年3月告示』p.98
- (2) 文部科学省(2009a), 前掲書, p.99
- (3) 拙論(2012)「高等学校の音楽学習における「音や音楽と生活や社会とのかかわり」ーポピュラー音楽教材導入の実態調査からの考察」『上越教育大学研究紀要 第31巻』上越教育大学, pp.339-349
- (4) 西園芳信(2009)『中学校音楽科の授業と学力構成ー生成の原理による授業デザイナー』廣済堂あかつき, p.29
- (5) 朝日新聞朝刊(1993.7.1)『高校教科書柔らか変身(メディア)』, p.29
- (6) 文部省(1989)『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局, p.94
- (7) 日本音楽教育学会(2007)「J-POPと学校教育」『音楽教育実践ジャーナル Vol.5 no.1』日本音楽教育学会, pp.61-65
- (8) 文部科学省(2009b)『高等学校学習指導要領解説 芸術編』大日本印刷, p.12
- (9) 文部科学省(2009b), 前掲書, p.12

- (10) 西園芳信 (2009), 前掲書, p.29
- (11) 小泉恭子 (2000) 「メディア教育としてのポピュラー音楽教育の可能性」日本音楽教育学会『音楽教育学研究1』音楽之友社, pp.117-118
- (12) 小泉恭子 (2000), 前掲書, p.118
- (13) 小泉恭子 (2000), 前掲書, p.118
- (14) 小泉恭子 (2000), 前掲書, p.118
- (15) 小泉恭子 (2000), 前掲書, p.118
- (16) 栗飯原喜男 (1981) 「ポピュラー音楽導入への試み」『季刊音楽教育研究 第28号』音楽之友社, p.36
- (17) 小泉恭子 (2000), 前掲書, p.119
- (18) 小泉恭子 (2000), 前掲書, p.119
- (19) 日本音楽教育学会 (2007), 前掲書, p.62
- (20) 日本音楽教育学会 (2007), 前掲書, p.62
- (21) 日本音楽教育学会 (2007), 前掲書, p.61
- (22) Frith, S. (1981), *SOUND EFFECTS Youth, leisure, and the politics of rock'n'roll*, Pantheon, p.38
サイモン・フリス (1991) 『サウンドの力 若者・余暇・ロックの政治学』晶文社, p.55
- (23) 阿久悠 (1999) 『歌謡曲って何だろう』日本放送出版協会, p.60
- (24) 阿久悠 (1999), 前掲書, p.61
- (25) 阿久悠 (1999), 前掲書, p.65
- (26) 阿久悠 (1999), 前掲書, p.66
- (27) 世相風俗観察会編 (2001) 『現代風俗史年表 昭和20年 (1945)～平成12年 (2000)』河出書房, pp.431-433
- (28) 難波江和英 (2004) 『恋するJポップ』冬弓舎, p.78
- (29) 伊豫田康弘編 (1996) 『テレビ史ハンドブック』自由国民社, pp.138-139
- (30) 藤川大祐 (1999) 「ヒット曲の変化と子どもたちの状況」『金城学院大学論集人文科学編32』金城学院大学, p.122
- (31) 藤川大祐 (1999), 前掲書, p.122
- (32) 森永卓郎 (1997) 『〈非婚〉のすすめ』講談社現代新書, p.80
- (33) ワーズアンドミュージック (2010) 『地球音楽ライブラリー 榎原敬之』TOKYO FM出版, p.25
- (34) 文部科学省 (2009a), 前掲書, p.98
- (35) 文部科学省 (2009b), 前掲書, p.13

About “education contents” by the J-POP in the music learning of the high school : “The adoration” that is described in the songs’ words which are placed in the textbook of the music

Yûji OZAKI*

ABSTRACT

J-POP has been placed in the textbook of art subject <music> of the high school as the song teaching materials mainly. However, “education content” is not clear what a teacher is going to teach a high school student by these teaching materials. Therefore the writer analyzed words of the music textbook’s songs and considered the connection with “the cultural side of the music”.

As a result, it was revealed that those words featured the theme of “the life” and “love”. In addition, the contents let a student , not a thing promoting the satisfaction to the present conditions, have hope to the future , helped each other and encouraged each other. And, through letting a student receive a scene or the feelings that these words expressed, the writer got a conclusion that it became “the education contents” that the teacher taught the way of life of the human being to a student.

* Music, Fine Arts and Physical Education